

## プラトンに於る「行為」の問題：プラトン前期対話 篇の基本的思考を求めて

吉田, 正章  
九州大学大学院：博士課程：哲学史

<https://doi.org/10.15017/27515>

---

出版情報：哲学論文集. 12, pp.21-36, 1976-09-25. 九州大学哲学会  
バージョン：  
権利関係：

# プラトンに於る「行為」の問題

—— プラトン前期對話篇の基本的思考を求めて ——

吉 田 雅 章

【ゴルギアス】(四六六A — 四六七C) に於るソクラテスは、對話人物ポロスにとってはまことに奇妙にして不可解な、或るひとつの主張をなして、ポロスをすっかり困惑に陥れてしまっている。その主張とは、何か次のようなものであった。

「彼ら(弁論家たち)は、彼らにとって何であれ、よいと思われることは為してはいるが、彼らが意志(欲求)していることは何ひとつ為してはいない」

すなわちこの箇處に於て、ソクラテスの意図している狙いは、(1)「意志することを為す」 *noieiv á Bovlétaai* ということと、(2)「(最善である)と思われることを為す」 *noieiv á av dokh' avtá Bévletoia éivai* ということを峻別することにあつた。だがしかしほんとうのところ、この(1)と(2)との区別は、ただ単純にそれだけの区別であるのではない。それは、或る背景を持つ構図のうちに最も尖鋭化されたものとして、前期對話篇の「行為」をめぐつてあつた問題がすべて、そこへと結晶してゆく、まさにそのひとつとしてあつたのである。とは言つても、無論それは、筆者の独断に外ならないであらう。以下に於て、プラトンのその思索の途を、出来うるかぎり正確に辿り、把握するために、この「行為」ということ

を中心に据えて、それと何らかの内的必然性を持つて語られる、「意志」と「思われ」(そしてプラトンに於ては、この「思われ」と常に対比して語られる「知」)は、「行為」と如何なる場で、どのように関わってゆくのかを検討することが、この小論の目指すところである。

いったい果して、プラトンの前期対話篇群のうちに於て、「行為の問題」とは何であったのか。それはどのような場を経つつ形づくられてゆき、如何なる展開をみせているのか。この問いに充分に答えることは、およそ至難の術わざと言わなければならぬ。というのは、たしかにこの「行為の問題」は、前期対話篇を通じて、その核心とも言うべき、「如何に生くべきか」*πως βιωτέον* : という問いと、その問いをめぐる思考に貫かれながらも、それぞれの対話篇の主題とその展開に即しつつ、様々な場面に於て、様々な様相を呈しているように思われるからである。従って、ここに於ては「行為の問題」の様々なその様相を、際立っていたいくつかの点からスケッチすることから始めて、まずこの核心的問いをめぐる、プラトンの思考の輪郭を少しでも浮び上らせるべく努めなければならない。

## 二

プラトン前期対話篇の「行為」をめぐる問題は、その多くの箇処でもかくもまず、「行為の確実性」を求めて、「我々の行為を誤らせることなしに、ただしく導くものはいったい何か」という問いかけと、それに応じ得るものは唯一(「知」)に他ならぬ、という形に於て顕われているということは、余りにも周知のことであろう。それは普通には、「徳は知である」という、ソクラテスのパドクスを語るものとして理解されていることである。<sup>(2)</sup>ところでそのことは、(1)或る場合には端的に語られているが、(2)他方また殆どの場合に於ては、いわゆる諸技術知を様々な仕方かたで介在させて語られているのである。

- (1) 『プロタゴラス』(三五二C)に於るソクラテスは、我々の行為に於る知の役割について、こう語っている。<sup>(3)</sup>

「……知識とは立派なものであり、人を支配することの出来るものであって、もし人が善きことと悪しきことを認識すれば、何によつても、打ち負されて知識が命ずること以外の他のことを為すなどということは決してなく、〈知〉は人を救うのに充分なるものである」と。

(2) しかし他方、この「行為の確実性」に関わる必然的な要素としての〈知〉は、諸対話篇の多くの箇處に於て、現実に存在し、しかも行為の確実性を保証しているものとしての諸技術知を、様々な仕方で介在させて語られている。例えば、

——笛を吹くことにかけては笛吹きが、文字の読み書きに於ては読み書きの先生が、海難の危険に際しては舵取りが、病いの場合には医者、そしてあらゆる場合に、「知」は人々が成功を得るようにするものである。「なぜなら知は、何時、何についても誤ることは決してないからであつて、ただしく為して、その目標を得ることが必然なることだからである。そうでなければ、もはや知ではないであろうから」——<sup>(4)</sup>

〈知〉はまさにそういう権能を有するが故に、そのみが唯一我々の行為をただしく導き、我々を裨益し、幸福にするものであるとされるのである。

さて以上のような仕方で述べられる、「徳は知である」という主張が、我々に説得的であるとすれば、それは(2)に於て語られているような、諸技術知の確在と確実性に、つまり「技術家たちは、事実そうしているではないか」というところにあるであろう。そうだとすれば、「徳は知である」ということは、そのような技術知の確在と確実性を基根にして、我々の行為をただしく導き、我々の生を保全するの何か知であり、そのような知もあるはずである、と主張しているわけであろうか。しかし我々は、これに対して否と答えなければならぬ。というのは、この(2)に於るような技術知の存在と鮮明な対照点を示す、もうひとつの表明を、我々は諸対話篇のうちに読み取ることが出来るからである。つまりそれは、「善・悪」を知つて、我々の行為をただしく導き、我々を幸福にするという〈知〉の探求が、それを何処にも見出すことが出来ないまま、アポリアのうちに終始しなければならぬ、ということである。<sup>(5)</sup>では、このように一見矛盾するかに見える、「徳は知である」と

いう主張と、「そのような知は現前していない」という二つの主張は、プラトン自身にとって、何処でどのような内的統一性を持っていたのであろうか。

ところでさて、事態が以上のようなであるとすれば、「行為」の問題とは、ただ先の(1)と(2)に於るような仕方で、「行為に於る知の必然性」を語るだけでは決して尽されないのであろう。むしろ我々は、そもそも我々の(為す)(行為)ということが如何なる場面に於て成立しているのかという、その場を問ひ拓くことから始めなければならぬ。その場をそれとして析出し、顕現させなければならぬ。たしかに、「我々の行為をただしく導くものは何か」という問いに、我々は第一にまず様々な諸技術知を予想し、枚挙する。つまり、大工も医者も舵取りも「事実そうしているではないか」、というので。しかしその時、我々はあらためて問い返さなければならぬ。「そうしている」とは、いったい何をどうしているのか、そしてその場合に技術家の持つ知とは、その行為に於て如何に働いているのか、と。そうしたことが、もし明らかにされないままに置かれるとすると、それぞれの技術知は、先の(2)に於て示されているように、「あらゆる場合に、我々がそれぞれをただしく為し、その目標を得ることを可能にするもの」なのだから、およそ一切の技術知が我々に備わって来ることになれば、(1)のように徳としての知を語り得る場面など、いったい何処にその在処を持っているのか、と疑われもするであろう。そしてその時、我々は技術家たちが横暴を振舞うのを許さざるを得なくなる。従つてここに於て、まずは知識・技術知に基づいて(ἐπιστημῶνας, τέχνας) 行為し、生きること、そのことがそのまま「よくなし、幸福であること」(εὖ πράττειν τε καὶ εὐδαιμονεῖν)とは決してならない、<sup>(8)</sup>ということがはっきり確認されなければならないのである。

『カルミデス』(一六四A—B)に於るソクラテスは、次のような問いを発している。

「果して医者にとっては、医者として為すべきことである治療を為す場合に、有益に・よく(ὀφελίμως) そうする場合とそうではない場合とを知っていることも必然のことであろうか。そしてまた、他の諸技術家たちのおおのにとつても、

自分の為す行為によって作り出されるもの(ἐργον)から、ひとが裨益されるか否かについて、それを知っていることも必然であろうか」

これはクリティアスによって提出された、「善きことどもの行為が思慮の健全なることである」という定義を吟味するに当って語られており、そしてこの吟味に於て前提条件となるものとして、両者によって承認されていたのは、「思慮の健全な者は、自分が思慮健全であるということを知らぬことはあり得ない」という、思慮にとって必然的要素としての〈知〉の契機であった。

ところでさて、ソクラテスによってここで問われている事態は、いったい如何なる事態であるのだろうか。そもそも医者とは、医者として為すべきことをなし、そして人(つまりは病人)を健康にすれば、それで医者は有益なものを作り出したことになる、と考えられる。それにも拘らず、治療するというその行為によって作り出される健康が、その人(治療される者のひと)にとって有益でよきことであるのかどうか、そしてそのことを、医者がまさに医者として知っているのかどうか、ということが問われているのである<sup>(9)</sup>。

だがそれはいったいどういうことなのであるだろうか。いったいその場合に、医者は医者として何を知っているのだろうか。無論のこと、医者は自らの持つ医術知によって、正に自らの為している治療を、つまり何をどのように治療しているかについては、これを知っていなければならぬ。しかし、医術知を持つものとしての医者が知っているのは、ただそのことのみなのである。治療するというその行為が作り出す、健康という身体の「よき」(ἀρετή)が、誰にとつて、何時、「よい」(有益な)のか、「悪い」(有害な)のか、或いは一般に諸技術家の為す行為によって作り出されるもの(ἐργον)から、ひとが裨益されるか否か、ということについては、医者、総じて諸技術家は、自らの持つその術知によっては知ることは不可能なのである。だが他方、「医者は自らの為すべきこと(治療)を為し、人を健康にすることで、時によっては有益なことを為すであろうし、時によっては有害なことを為すであろう」。だがたとえ、その行為が有益である場合にも、医者は医者として

は知り得ないのである。しかしこのことは、先に前提されていた〈知〉の条件に適わないことになる。すなわち、「よき（有益な）ことの行為が思慮の健全なることである」というのが定義であったが、現在の吟味の結果、もしよきことの行為を為しているとしても、その行為者は、そのことを知ることが不可能であるということになったのだから。

### 三

さて、以上のような『カルミデス』のこの箇處の考察は、我々の行為に関わるいくつかの要素を明らかにすることにより、我々の行為の成立している場面を、我々に垣間見せてくれているように思われる。つまり、我々の行為とは、ただ「何かを為し、作り出す」というだけで決してあるのではなく、「そうするのが、よいのか悪いのか」ということが問題とされる、そのような場に於てあるのだ、ということであり、従ってそこに於ては、諸技術家の有する知は、行為するものの為すことを——何を、どのようにすれば、目指す目標が得られるかを——知っているという点に於てそれぞれ、何か或る事柄を我々に「成し遂げ、実現することを可能にするもの」ではあるが、「そうするのが、よいのかどうか」については知り得ないという点で、決して我々の「よくなすこと」を可能にするものではないのである。

ところで、この諸技術家の有する、そのような〈知〉の権能は諸對話篇に於て、ひとつの能力(*dynameis*)として把握され、規定されている。すなわち能力とは「それぞれ或る固有なもの（いわゆる対象）に関わり、何かを成し遂げるものなのであり、そしてそれぞれの能力は、何に関わり、何を成し遂げるかによって区別されるのである」。従って技術知は、そのように規定されたものとして、それぞれ固有の対象に関わり（「何か」の知であり、何かを成し遂げるものであるとされるのである<sup>10</sup>）。さらにそのことは、別の観点からすれば、技術知の生れ出でた〈定め〉として考えられる。つまり、それぞれの技術知、例えば医術知は、「身体というのがそれ自身では自足出来ず、欠陥を持ちうるものであり、まさに何かを必要とするが

故に、そのため、(利益)を計るものとして、医術知という *techné* は現在発見されてあるものであり、まさしくそこへ配置されている<sup>(11)</sup>のであって、「そこへ縛りつけられていて、そうせねばならぬこと *ta déonta*」<sup>(12)</sup>を為すように生れついでいるのであり、他方、「技術知はそれ自身で充足しており、何ひとつ欠陥を持たぬもの」<sup>(13)</sup>なのである。従って、そのようなものとして、まさに諸技術知の存在は、我々に「それぞれのことを成し遂げ、実現することを可能にしている」のだということは、肯首しうるところであろう。

しかしながら我々の問題は、いうまでもなく、そのような技術知を有する者が「それぞれのことを成し遂げ、実現する」ということが、何故我々の「よくなす」ということとそのままひとつにならないのか、というところにあるであろう。或いはそれは、諸技術家によって作り出されるもの・成果 (*éponos*) というのが、我々にとって如何なる意味を持っているのか、ということでもある。というのは、例えば「健康であること」は身体にとって善いことであると言われるように、それに就いても或る意味では「よい」ということが語られるのだから。

ところで、「我々は如何にして幸福でありうるのか」という問いに対して、「善きもの(こと)が我々にそなわれれば」と答えることは正しいと思われる<sup>(14)</sup>。しかしさらに、これを「では、およそ存在するもののうちで、どのようなものが善きものであるのか」と問い、富や健康や権力等を善きものとしてリスト・アップすることで、この「幸福への問い」を我々は完結させることが出来るのであろうか。<sup>(15)</sup>もしそうであるとすれば、「健康であること」は、時によっては善いことであるが、時としては悪いことであると語られる場合に、その「よい」「悪い」ということは、いったい何を意味していると言うのであろうか。プラトンに於て、「善いこと」とは、少なくとも「それがそなわれれば、そなわるものを益する」ということであつた。従つてその場合、まさに問題となるのは、「善きことが我々にそなわる」という、そのことが、我々に於て如何なる仕方であるのか、ということではなければならない。そうであれば、善いとされるものの場合に、それらがまた悪いこともある以上は、どのような場合にそれらが我々を益するのか、どのような場合にそうではないのか、問わなければならないであろう。そし

てその問いは結局のところ、我々の「爲すこと」(それらを獲得したり、使用したりすること)へと、そして我々の「よく  
なすこと」(正しく獲得し、使用すること)へ導かれざるを得ないのである。<sup>(6)</sup> してみればそのことは、「よきことが我々に  
そなわる」というのは、真実のところ我々が「よくなす」という仕方でしかあり得ないのだ、ということを示していると言  
わなければならないであろう。そしてその場合に語られる「よい」とは、例えば、身体にとって「よい」というような、部  
分的で、何か一義的に限定されたものではなく、全体としての我々自身にとって、限定なしに「よい」ということでなけれ  
ばならないのである。というのは、その際に語られる「よい」とは、他のそれと比較するすべもなく、我々自身にとって  
「最大の事柄<sup>(7)</sup>」なのであるから。つまりその点に於てこそ、我々の行為がただ「何かを成し遂げ、実現する」というだけで  
あるのではなく、「そうするのがよいのかどうか」と問われる場に於てある、ということの意味があったのである。

だとすれば、最早我々は、「行為をただしく導くもの」として、「行為に於る知の必然性」を一面的に語ることに、到底  
満足することは出来ないであろう。つまり、技術知というのが、以上に規定されたような仕方であるのであれば、それは決  
して、あらゆる技術知が我々に備わっても、「よくなすこと」にはならないからである。否、プラトンにとって「行為」の問題  
とは、まずもって我々自身の「よくなすこと」に関わる問題なのであり、行為するものとしてある、我々自身のあり方に関  
わる問題なのである。すなわち、我々は行為するものとして、「そうするのが、よいのかどうか」と問われる場に、つねに  
いるのであり、「よくなす」ことにより、「善きもの」となり、そして「悪しくなす」ことにより、「悪しきもの」となるの  
である。まさにその意味に於てこそ、我々の「(生)」もそこにあり、そして「(徳)」の、本来語られるべき場もまた、そこにあ  
ったのである、と謂わなければならないであろう。

さて先に進む前に、スケッチすることから出発した、以上の考察に於て、いったい我々に何が明らかなこととして得られ、  
何が不明なままに残されているのか、いくらかの点から、整理して考えて置こう。すなわちそれはまず、プラトンに於る、

「行為」の問題をめぐる思考がその根柢に於て、我々自身に関わる「よくなすこと」(εὖ πρᾶττειν)の可能性をめぐるであったということであろう。

(a)ところで、そこに於てはまず、諸技術家の有する〈知〉の権能は、先程明らかになったように、総じて、我々自身に関わる「よくなす」ということに就いて、その確かさを保証してくれるものでは決してなかったのである。それはただ単に、それぞれの事柄を成し遂げ、実現することを可能ならしめるというにすぎなかった。しかしむしろ、我々の「よくなす」ということは、それらの諸技術知の権能を越えたところで、まさに顕われ来たり、語られなければならないのである。

(b)しかし他方、諸技術家たちをその代表として、一般にそれぞれ「そうすることの出来るもの」(ὁ δυνατός)という仕方で把握される場合、そのものがそれぞれ自らの仕事を成し遂げ、実現するということは、決して単にそのことだけに止まることは出来ない。それはいつも、「よく」そうしているのかどうか、ということが問題とされる場面に開かれているのである。すなわち我々は、「何(x)を為すにせよ、それ(x)を「よく或いは悪く」為すのである。まさにその意味に於て、我々の行為とはつねに、「xを為す」というだけではなく、必然なることとして「xを為すことは、よい或いは悪い」(以下、「よい・悪い」ということを伴ない、そのもとに於て為されるという、いわば二重のあり方をするのだと謂わなければならない。

ところでは、そこにはひとつの問題が生起するであろう。すなわちその問題とは、「xを為すこと」(技術知の関わることのみならず、例えば、歩くこと、走ること等)というのは、前期対話篇のいくつかに於てそう規定されているように、<sup>108)</sup>そのもの自身としては「よくも悪くもない」中間者という存在なのである。それにも拘らず、何故にそれが、我々の行為に於ては、「xを為すことは、よい・悪い」という仕方に於て顕われることになるのか、<sup>109)</sup>ということである。この問いは、我々の行為が如何なる必然の故に、二重の構造を持つというあり方のうちになければならないか、という問いと軌を一にしていると考えられる。しかしこの問いが、真に問われうる場は未だ秘められたままである。

(c)さてさらに、我々自身に関わる「よくなすこと」の可能性は、〈知〉に懸っているということが先に謂われていた。ところで、そのように我々の行為を善きものたらしめうる〈知〉とは、いったいどのような知であるのか。諸技術知とは、既に(a)に於て示されたように、その〈知〉たり得なかった。しかしもちろんながら、それがひとつの知である限りに於て、それは「何か」の知でなければならぬ。「何か」の知でないような「知」はないであろう。プラトンは言う、「善と悪」とを知る知である」と。そしてそれこそは、我々を裨益し、我々を幸福にする〈知〉である。なぜなら、我々の「幸福であることを」は、我々の「よくなすこと」によっているのだから。しかしそれと同時にたしかに、この〈知〉について、それを「何か他の諸知を一切、包括するような知」、という仕方で追求するとすれば、人はアポリアに陥らざるを得ないであろう。そうした方向にこの知を求めることは、既にプラトン自身によって否定されているのである。<sup>(21)</sup>つまりそうしたアポリアのうち、我々はこの〈知〉が現前していないのだからと知るのである。だが、現前していないということの意味は大きい、と謂わなければならないだろう。その〈知〉が現前していないという、まさにその点で、我々是我々の行為の「よし」「悪し」ということに関して、丁度根無し草の如くに、その場その場に臨み、頼れぬものに頼って浮き沈みする他ないのである。それがここ、に於て、我々の姿なのである。では以上のような状況の中で、我々自身の「よくなすこと」に関わると謂われるこの〈知〉の可能性を、我々はいったい何処に、どのような形で求めればよいと謂うのだろうか。

さて以上の(a)、(b)、(c)の考察に於て現われたこれらの問いに、我々は現在のところ如何に答えうるのだろうか。およそ答えることは出来ないであろう。従って今は、我々の行為のあり方について、さらに考察を続けてゆかなければならない。そうした考察から、それらの問いに答えうる途もまた、発見出来るであろうと信じて。

まず差し当っては、「我々自身の行為の重層的なあり方」という問題提起の持っている意味について、考察を加えて置こう。すなわち、我々の行為は、ただ単に「xを為す」というだけであるのではなく、必然なることとして「xを為すことは、よい・悪い」ということを伴なうという、重層的な構造を持つものとして把握されていた。しかしながらそのような重層性は、我々の行為のあり方の、如何なる必然に基づいているのであろうか。

まずは次のように答え得るであろう。「xを為すことが出来る」ということが、決して我々が「xを為す」ことの、真の原因とはならないからだ。つまり、「欲求(意志)する場合に(ὅταν βούληται)欲求するそのことを為すことの出来る人、そのそれぞれが、能力ある・そうすることの出来る者(δυνατός)である」<sup>22)</sup>からである。もちろんこれだけで、最初の問いのすべてに答えているというわけではない。しかし少なくともそれは、「xを為すことが出来る」→「xを為す」という、我々の行為の構図としては擬似構図の、その連鎖を断ち、我々の行為のあり方を顕わにする途に、重要な一步を標すものではあろう。すなわち、「xを為すことが出来る」ということが原因ではなく、「xを為すことを欲求(意志)する」ということが、「xを為すこと」の真の原因なのだ。ところでしかし、既に述べられたように、この答えは、行為の重層的なあり方への問いのすべてに答えるものではない。それはひとつには、無論のこと、この答えに於て「xを欲求する」ということと、「xを為すこと」との関係は明らかにされているにしても、その「xを欲求する」ということが、我々の行為の重層的なあり方に如何に関わり、何処に定位されるのか、については未だ不明であるからである。だがそれと同時に、差し当り重要なのは、その答えがそれ自身では完結していないで、「xを欲求するものは、何故にxを欲求するのか」という、更なる問いを喚び起すであろうという点にある。しかし、この更なる問いは、我々の(欲求・意志すること)(βούλησθαι)の、その根拠(Ground)を問い質す問いである、と考えられる。そうであれば、先の答えが完結されるためには、ここに於て

「行為」の考察は、我々の〈欲求する〉ということについての考察へと及ばなければならないことになる。

たしかに、ソクラテスのパラドクスとして、「すべての人は善を欲求（意志）している」という命題はよく知られているであろう。だがしかし、その「すべて人が欲求しているのは、善である」ということは、「xを欲求するものは、何故にxを欲求するのか」、という問いと如何なる関係にあるのだろうか。先にも述べられたように、我々の行為のあり方に於るひとつの問題は、xはそれ自体としては「よくも悪くもない」中間者という存在であり、「善・悪」ということを含意していないにも拘らず、我々の行為に於ては、「xを為すことは、よい・悪い」ということが問題になる、という点にあった。従って、我々の〈欲求する〉ということに於て、もし「善」と「x」との間に何らかの、或る関係が認められるとするならば、このソクラテスのパラドクスと、先の問い「何故にxを欲求するのか」、との関係も明らかになるであろうし、我々の行為のあり方についても、或る程度は説明されるのではないかと思われる。ではこの両者は、果して如何なる関係のもとに置かれていたのであるうか。

ところで、このソクラテスの命題がパラドクスであると言われるのは、当然ながら世の人々の多くが、「悪を欲求している人々もいる」と考えているからである。<sup>(24)</sup>「悪しきことを欲求している人々は」、とソクラテスは問う、「(I)悪しきことを善きことであると思つてなのか、それとも(II)悪しきことを悪しきことであると知つていて、悪しきことを欲求している (ἐπι-*Buhouōsin*) のか」。そしてさらに、「悪しきことを欲求している人(II)は、その悪しきことがその人自身にそなわる (その人のものとなる) ことを欲求している」のだとされておき、以上のことは、次のように纏め、言い換えられることになる。「悪しきことを欲求している人」は、(IIa)「その悪しきことが、誰のものになるにしても、その者を益すると考えて」なのか、それとも、(IIb)「悪しきことは、誰のものになるにせよ、その者を害すると知つていて、悪を欲求しているのか」。このソクラテスの問いに対し、メノンの答えは、その両者の存在を認めている。従つてソクラテスは、その両方に対して反駁を試みることになる。<sup>(25)</sup>

ところで、我々の当面の考察に重要な関わりを持つと思われるのは、(IIa)に対して試みられるソクラテスの考察である。この(IIa)については、さらに次のようなことが語り継がれている。「悪しきことがその人を益すると考えている人々は、悪しきことが悪しきことであると知らないわけだ。そこでその人々は、悪しきことを欲求しているのではない、ということは明らかである。悪しきことだと知らないのだとすれば、いや彼らは、それを善きことであると思つて、それを欲求していたのである。だがそれは、実際は悪しきことなのである。——従つて彼ら(IIa)は、善きことを欲求しているのだ、ということは明白である」。

さてソクラテスは、ただこれだけのことから、この(IIa)の人々が、悪しきことをではなく、或いはまた、善いと思われたことをでもなく、「善きことを欲求している (τὸν ἀγαθὸν ἐπιθυμοῦσιν) のだ」と、如何なる根拠に基づいて主張することが出来たのであろうか。そしてまたその根拠は、以上に述べられたことの何処に存するのだろうか。というのは、まづもつて、このソクラテスの反駁のうちには、通常、諸対話篇に見られるような論証を、何処にも見出すことが出来ないからである。ただそこには、この両者によつて同意されている、ひとつのことがあるのみである。それは、(IIa)の人々が「善・悪」のいずれを欲求しているにしても、「その人々は、悪しきことを悪しきことであると知らず、悪しきことを善きことであると思つて」、そうしている、ということであり、従つて我々は、ソクラテスの主張の根拠は、この同意のうちにあるのだと考へなければならぬであろう。

ところで、この同意されている文は、(IIa)の人々について語り継がれたことが示すように、次のように書き換えることが出来るであらう。xは実際は悪しきことであるが、「xを善きことであると思つて」、欲求している。つまりこの場合に、(IIa)の人々は「xを善きこととして、欲求している」のであり、彼らが欲求しているのは、まさにその「善き」なのである。

さてでは、以上のことから、我々の「欲求すること」について、いったい何を我々は語り得たのであろうか。それについては、ただ、まさしく「善」へ向つている、と語る他ないであらう。

しかし、我々は謂わなければならない——そのことを自らのこととして確認する、まさにその限りに於て、もはや我々は、根無し草の如く浮沈する、「自らの思い」をはるか超えて、かの〈知〉を愛し求める営みのうちに住いするのだ——と。

註

- (1) この問いは、文字どおりの表現としては『ゴルギアス』(四九二D)に語られているものである。さらにこの時、『クリトン』(四八B)に於る、「大切なのは、単に生きるということではなく、よく生きる(εὖ ζῆν)ことだ」という、ソクラテスの言葉が想い起される。
- (2) このことについては、例えば最近のものでは、Gulley, N.: 'The Philosophy of Socrates, Macmillan, 1968, pp. 75-91, Guthrie, W. K. C.: A History of Greek Philosophy, Vol. III, Cambridge, 1969, Part two, pp. 450-459. を参照されたい。
- (3) 引用されている箇処の以降に展開される、いわゆるアクラシア否定の議論については、様々な問題を含むものとして、別に論じられなければならない。
- (4) 『エウチュデモス』二七九C—二八〇A。
- (5) このことについて、「知の知」という問題提起の展開と、その困難については、『カルミデス』(二六四D—一七六D)を、同じく、「諸技術の技術」のそれについては、『エウチュデモス』の、いわゆる二つのプロトレプティコス・ロゴス(二七八E—二八二E、二八八D—二九三A)を参照。
- (6) 『ラケス』(二九四D—一九五E)に於て、ニキアスの「〈勇氣〉とは、およそあらゆる場合に於る、恐ろしいものと恐ろしくないもの(複数)との知識である」という定義は、ラケスによって、「病気の場合には、恐ろしいものを知っているのは、医者であり、農事の場合には、それを知っているのは農夫ではないか」という反問を受けることになる。さらに、『ゴルギアス』(四五一D—四五二D)を参照。
- (7) 『アポロギア』(二一B—二二E)に於る「ソクラテスの遍歴」のうち、諸技術家たちへの訪問を参照されたい。ここでは次のように語られている。「…それぞれの人は、自らの術知のことを立派に成し遂げるが故に、それ以外の最大の事柄についても、各々が、当然最高の知者だと考えていた。そこで、彼らのこの調子は、すれ(ἄλληλα)が、彼らの折角の知をすっかり覆いかく

- すことになる」。また前註の『ゴルギアス』の簡処も参照。
- (8) 『カルミデス』一七三A—D。
- (9) 『ラケス』(一九五C—D)、『ゴルギアス』(五一—C—五一—三A)を参照。
- (10) 技術知はひとつの能力である、というより、技術知の持つ能力(機能)という表現が多く見られる。その能力(機能)というところで、技術知の「何であるか」ということはすべて定まっているのである。『ゴルギアス』(四四七C)、『カルミデス』(二六八B—D)、『ポリテア』(三四六A、四七七C—D)等、参照。
- (11) 『ポリテア』三四一C—三四二B、三四六D。
- (12) 『カルミデス』(二六四B)。「*το δέον*」というのは、「そうでなければならぬこと」と「縛りつけること」の両義を持つと謂われる。そのことについては、また『パイドン』(九九C)を参照。
- (13) 註(1)の簡処を見よ。
- (14) 『シュムポシオン』(二〇四E—二〇五A)、『アルキピアデスI』(一一六B)、『エウチュデモス』(二七九A)、『ゴルギアス』(四九七E、四九八D)参照。なおここに於て、「そなわる」と訳されているのは、*γενέσθαι αὐτῶν (ἵμιν), κτήσις, παρέρχεται*等の語である。
- (15) 『エウチュデモス』二七九A—二八〇A。
- (16) 『エウチュデモス』(二八〇A—E)、『メノン』(七八C—E、八七E—八九A)を参照。
- (17) 『アポロギア』(二二D、三八A)、『アルキピアデスI』(一一八A—B)、『ゴルギアス』(四七七A—四七八B、五二七E)参照。
- (18) 『ゴルギアス』四六七E—四六八A、『エウチュデモス』二八一A、二八一D—E、『リュシス』二一六D、『メノン』八八C。
- (19) 前註の、『ゴルギアス』の簡処(四六七E—四六八A)に於て、「それらは、時には善に与かり(ἀεὶ καλῶν)時には悪に与かる」と語られていることで、或る線は示されている、と言えるであろう。しかし、むしろ問題は、我々の行為のあり方をめぐって、その *heterēter* ということの意味を確認しなければならない、ということである。
- (20) 『カルミデス』(一六六A、一六八B)、『ポリテア』(四三八C—D)を参照。
- (21) 註(5)の簡処、参照。
- (22) 『ヒッピアス(小)』三六六C。

(23) まさにこの問いを顕現させぬことによって、『ヒッピアス(小)』全篇は、パラドキシカルな結論を導き得たのだといわなければならない。

(24) 『メノン』(七七B—七八B)に於る対話人物メノンもまた、その一人であった。以下の議論の考察は、『メノン』の、この箇処に於て為されているものそれ、である。

(25) (IIb)の人々については、以下に示されるような仕方、その人々の存在が否定されることになる(七七E—七八B)。  
悪しきことは、それがそなわる人を害する限りに於て、その人を難儀させ、不幸にする。

難儀し、不幸であることを望むものは誰もいない。

従って、悪しきことが人を不幸にする以上、悪しきことを悪しきことであると知りながら、これを欲求する人はいない。

(本学大学院博士課程・哲学史)